様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０３３５４

研究課題名（和文）宗教現象学の歴史的変遷と地域性に関する包括的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Study of the Diverse History of the Phenomenology of Religion

研究代表者
藤原　聖子（Fujiwara, Satoko）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：１０３３８５９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,960,000円

研究成果の概要（和文）：宗教学は近代的人文・社会科学の一つとして19世紀末に形成されたが、一世紀以上にわたるその歴史の中で、宗教学独自の方法論を提唱し、それによらなければ宗教を真に理解することはできないと主張したムーブメントは宗教現象学派のみである。本研究は、この学派に対する従来の批判はその実態を十分にとらえていなかったのではないかという問題意識から、10カ国の関係者への聞き取り調査と未公開資料を含む歴史的資料の分析をもとに、宗教現象学の成立と受容、現在の各国での評価に至るまで、その多様な展開を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、1990年代以降急速に廃れたこの学派を単純に再興しようとするものではなく、学術的意義は、宗教学史の理解に一石を投じたところにある。科学派対宗教派、還元論と反還元論、構築主義と本質主義、西洋対東洋といった二項対立で整理されがちな宗教学史は、宗教現象学に対する評価と表裏一体であった。宗教現象学の多様な展開を示すことは、これまでの欧米中心的かつ進歩史観的な宗教学史の語り方に見直しを促すことになる。国際的な研究交流に早くから関わりながらもこの二項対立に常に悩まされてきた、日本の宗教学ならではの視点を活かしている。研究成果を英文書籍でも出版することにより、国際的なインパクトが見込まれる。

研究成果の概要（英文）：The phenomenology of religion is a branch of the study of religion that claims to represent the core of the discipline. It became popular in the 1960s, then met severe criticism, culminating in the 1990s, and mostly disappeared. Although scholars now regard it as a theory of only historiographic interest, no scholar concerned with the disciplinary identity of the study of religion can ignore it. Yet, this project is not an attempt to rehabilitate it. It offers a different way of looking at the non-linear theoretical development of the study of religion.
This project has thus investigated: how the phenomenology of religion was accepted and developed in different national contexts; why it disappeared so abruptly in the 1990s; how scholars currently evaluate it. It consists of interviews with senior scholars in 10 countries, conducted by both Japanese members and international collaborators. The Japanese members have also enriched the interviews by analyzing historical materials in depth.

研究分野：宗教学

キーワード：宗教現象学　学説史　学問史　ドイツ　オランダ　イタリア　北欧　比較

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

「宗教学とは何か」についての理解は、大きく２つに分かれてきた。ひとつは、宗教学は「宗教」という対象を共有する、多様な方法論をもつ研究の集合体であるという見方である。これに対して、宗教自体を主題とし、宗教学独自の方法によりそれを総体的にとらえることが必要だという見方がある。後者をとるものが宗教現象学であり、その独自の方法は、世界の諸宗教を比較し共通要素を取り出すという形式的側面と、宗教はその内側から理解されなければならないというイデオロギー的側面をあわせ持っていた。

この宗教現象学は、オランダ、北欧、ドイツ、イタリア、アメリカを中心に 20 世紀中葉前後から展開し、日本では 1960 年代から熱心に研究された。しかし、1990 年代以降、ポストモダン思想、ポスト・コロニアル批評に触発された宗教学の自己批判が国内外で高まると、宗教現象学はその本質主義的前提や宗教擁護的イデオロギー等について批判を受け、急速に衰退した。

しかし現在、改めてふり返ってみると、この宗教現象学の盛衰史には大きな不明点が２つある。それは、(a) 単に学術の流行の変化ということでは説明がつかないほど、上記の国々で宗教現象学があまりにも忽然と姿を消したことと、(b) 知名度は宗教学内では高いが、その全貌、すなわち各国でどう受容され、どう展開したかはよく知られていないことである。90 年代以降は、“sui-generist”“religionist”（宗教を実体化する宗教擁護派）というレッテルにより、宗教現象学を単純化して批判する風潮が北米宗教学会などから広まるが、その前から、そういった欠点を自ら克服しようという内部改革は起こっていた。それにもかかわらず、それを引き継いだ者がいるということは聞かない。また、宗教現象学を紹介する文献はどれも、欧米の研究者ばかりを対象にし、日本国内の独自の展開についてはほとんど言及していない。つまり、日本国内の受容史すら断片的にしかわかっていない。

こういった研究の空白状況が放置されてきたのは、宗教現象学は既に過去の遺物であると思われてきたためであろう。しかし、(a) と (b) の面を解明する必要性が、現在、新たに生じている。90 年代以降の宗教学の過度の細分化・実証化に対し、マクロに世界宗教史を語ったり、通文化的に宗教の本質的特徴をとらえようとする揺り戻しが起こっているが、そのような試みがかつての宗教学の単なる焼き直しに陥らないよう、宗教現象学の到達点をここで確認する必要がある。

２．研究の目的

宗教現象学は、宗教学のディシプリン・アイデンティティとして 20 世紀中葉前後に確立された分野である。1990 年代以降は時代遅れというレッテルを貼られ、国内外を問わず学界から後退した。しかし、その変化はあまりにも急速で、宗教現象学の到達点は確認されずじまいであり、またその国際的な全貌が明らかにされたこともなかった。それに対し、本研究は、(a) 1990 年代までの宗教現象学の成果とその突然の消滅の原因、さらに (b) 日本を含む各国で宗教現象学がどのように受容されたかを解明する。

３．研究の方法

上記 (a) については、従来の学説史の文献には載っていない、1980～90 年代の後期宗教現象学の内実・成果を調べ、なぜ内部改革の試みは潰えたのかを解明する。(b) については、国内で宗教現象学研究の中心となった諸大学について、1960～80 年代を中心とする宗教現象学の受容の過程とそのそれぞれの特徴を明らかにする。同じこと、すなわち宗教現象学が学界内にどのような作用・反作用を及ぼしたかをオランダ、スウェーデン、フィンランド、ドイツ、イタリア、イギリス、アメリカ、カナダ、韓国に関しても、海外の研究者との連携により解明を試み、その結果得た知見により、従来の学説史を更新する。

４．研究成果

(1)諸外国の宗教現象学史に関する全般的な成果

海外調査では、上記９カ国において宗教現象学研究を担った、ないし深く関わったと他の研究者から見なされている現在 70～90 歳の宗教学者に、海外の研究者の協力を得て聞き取りを行った。その結果、９カ国のうち、その国に確かに宗教現象学が存在した、ないし今も存在すると回答したインフォーマントがいたのは、現在の一般的理解（オランダ、ドイツ、アメリカ合衆国がその中心地であるとするもの）とは正反対に、イギリスと韓国に限定された。特にマールブルクの調査では、代表的な宗教現象学者と言われていたＦ・ハイラーが、宗教現象学者を自認していなかったことがわかった。また、宗教現象学の内部改革を試みたオランダのＪ・ヴァールデンブルクは、その海外での知名度に比して国内の学界ではマージナルな存在に留まり、インパクトがほとんどなかったこともわかった。つまり、インフォーマントから得られた情報に基づくならば、宗教現象学の突然の消滅の原因は、そもそも宗教現象学というものに実体がなかったからということになる。

これらは従来の宗教現象学史を塗り替え得る発見であったが、なぜこのような結果が得られ

たかについて分析を行った。特定の学派やカテゴリーに自分が他人によってアイデンティファイされることに対する一般的な抵抗感もあると考えられるが、それ以上に、「宗教現象学」という言葉のイーミックな用法にスペクトラムがあり（表１～３）、その明確化によりこの謎は説明づけられることがわかった。従来から、「宗教現象学」の語は多様な意味をもつということが指摘されてきたが、単に多様なのではなく、通文化的な分類と構造化が可能であり、それに基づき、各国の文脈での展開を比較し、それぞれの特徴を明確化することができた。

表１．記述的―本質観取的スペクトラム

分類学的	本質観取的
帰納的	直観的
経験的	共感的・理解
歴史学的	哲学的
科学的中立性としてのエポケー（判断停止）	理解の手段としてのエポケー
研究の初期段階としての宗教現象学	研究の目標としての宗教現象学
理論化前の情報処理作業としての宗教現象学	反・宗教還元主義運動としての宗教現象学

表２．総合的―選択的スペクトラム

総合的	選択的
直観や経験に焦点	左記の特徴の内、一部分のみを宗教現象学の特徴とみなす
意識に現れ出るものに焦点	
普遍的構造や本質を探究	
記述的	
比較	
歴史学的	
エポケー	
共感	
反還元主義	

表３．価値評価スペクトラム

価値がある	価値がない
合理的	非合理的
科学的／哲学的	神学的／宗教擁護
経験（主義）的	主観的
経験に強固に基づく	客観的妥当性に欠ける
内省により検証可能	反証可能性に欠ける
実直	ジャーゴンが多い
意味がある	つまらない
使い出がある	当たり前のこと／実用価値に乏しい
他者理解にとって重要	研究者自身のカテゴリーの投影

各国での宗教現象学の受容の詳細については、2020 年度中に国際宗教学会（IAHR）叢書の一冊（*Global Phenomenologies of Religion: An Oral History in Interviews*, Equinox）として発表する予定である。

(2)日本の宗教現象学史に関する全般的な成果

他方、このように整理できる宗教現象学の諸特徴、「価値判断停止」「共感的理解」「分類・類型化」「本質直観」などは、宗教現象学者以外にもしばしば見られるものばかりである。ということは、宗教現象学を宗教現象学たらしめていたのは、これらの諸特徴だけではなく、1960 年

代前後の時代状況特有の「何か」だったのではないだろうか。国内の聞き取り調査ではこの「何か」の解明を目ざした。

その結果は 3 点にまとめられる。

①「根本主義」と名づけうる傾向。日本の場合、宗教の sui generis 論よりも、存在の根源や人間の本性に迫りたいという意識が強く見られる。これは、戦前の国粋主義に対抗するものとして人間学を志向する研究者が宗教現象学研究者に多くいたこと、フィ―ルドワークをとり入れる場合も、柳田国男的な日本民俗学のエスノセントリズムからは距離を置いたことによると考えられる。人間学（ゲーレン、シェーラー、プレスナー）の宗教現象学への影響については、これまで欧米での宗教現象学の受容史においても看過されてきた点である。

②「運動」という研究のあり方。宗教現象学が衰退したのは、それが一つの運動であり、学問として確立されなかったからではないか。言い換えれば、それが廃れたのは、運動というもの全般に対する関心の低下によるのではないか。

③宗教体験や神秘主義への関心との重なり。この特徴が日本では特に著しいことについては、第二次世界大戦までのエソテリズム研究一般とファシズムの関係に対し、戦後、ヨーロッパとは異なる反省のあり方がなされたことが原因として考えられる。

(3)個別事例研究から得られた成果

(1)と(2)は研究分担者全員での聞き取り調査に基づく成果だが、他に、分担者それぞれの文献資料に基づく個別事例研究について次のような成果が得られた。

江川は、イタリアのサン・ジョヴァンニ・イン・ペルシチェート歴史文書館など欧州の学術機関にて、イタリア宗教史学の祖であるラッファエーレ・ペッタッツォーニに関する一次資料の調査を行った。その結果、1910 年代から 30 年代にかけて、宗教現象の歴史的コンテクストを最優先する「宗教史学」を掲げることで、自らの学問を「宗教現象学」から差異化していたペッタッツォーニが、国際宗教史学会会長に就任した 1950 年以降、今度は「宗教現象学」へと接近していった様を跡付けることができた。本科研による成果は、国書刊行会からの刊行が決定しているペッタッツォーニの翻訳書の解説として公刊される予定である。

奥山は、ミルチャ・エリアーデが宗教現象学を形成した過程を解明するために、ヴィットリオ・マッキオロの神秘主義研究、ナエ・イオネスクの現象学、およびユング心理学の archetype 概念との連関を分析した。1920 年代にブカレスト大学の学部生だったエリアーデは、ペッタッツォーニの宗教史学に接近する一方で、イタリアの神秘主義研究者として著名であったマッキオロの代表作『ザグレウス』から大きな影響を受けた。神秘主義体験を研究するための独自の方法論を模索したマッキオロの学問に触れたことは、エリアーデが宗教の還元不可能性について思索する契機となったと考えられる。さらにエリアーデが受講していたイオネスクの講義「宗教哲学」では宗教の普遍的特性を研究する方法論としての現象学の有効性を主題としており、エリアーデが「現象学」を受容する直接的な契機となった可能性が考えられる。また戦後に刊行した『永遠回帰の神話』や『聖と俗』では、宗教の普遍的特性である archetype を意識化することが人格や文化に積極的変容をもたらすことを説いており、ユング派への接近が見て取れる。宗教の還元不可能性と普遍的特性を対象化しようとするエリアーデの「宗教現象学」は、従来レーウやオットーを直接的に継承したものと考えられてきたが、マッキオロの神秘主義研究とイオネスクの現象学を基層としながら、宗教史学とユング心理学を統合しようとした過程において形成されたと考えられる。

久保田は、伝統的な宗教学史叙述においてオランダ宗教学の祖と見なされてきたコルネリス・ペトリュス・ティーレが、宗教学・宗教史学を構想するに至った文教政策的・学問制度史的・宗教史的文脈を検討し、いわゆるオランダ宗教学の成立期の特徴の解明を試みた。従来の研究において指摘されることの多かった、オランダの国立大学における神学部解体に関する政治的議論と並んで、オランダ社会における少数派であるローマ・カトリック教会の地位の確保を求める政治的自由主義陣営の動向、プロテスタンティズムの主流派である改革派教会内部の神学及び政治論争、少数派でありティーレが所属するレモンストラント兄弟団の動向等、宗教史的文脈の中に宗教学の成立過程を位置づけなおしてみることにより、オランダのみならず西洋世界における宗教学の宗教史的意味がより明らかになることが分かった。

木村は、ティーレの後続世代であるファン・デル・レーウの宗教現象学方法論の成立過程について、いくつかのテキストの比較研究をおこなった結果、1924 年から 1933 年の間に大きな変化が起きていることを明らかにした。特に自分の宗教現象学とフッサールなどの哲学的現象学との関係について慎重な立場をとっていたレーウが、1933 年にはその関係を前面に打ち出すようになってきている点は大きな違いである。また、ヤスパースやシュプランガーの構造心理学を導入したのもこの時期であり、今後この時期におけるレーウの宗教現象学の展開をより詳細に明らかにすることが重要であることが分かった。

宮嶋は「宗教現象学」とは何であったのかに関する歴史的な捉え返しの一環として、古典的宗

教現象学者のひとりであるＦ・ハイラーを取り上げ、これまで「神学的」とされてきたその現象学が、「比較宗教史」的宗教現象学と、哲学的（さらには神学的）な本質探究としての宗教現象学の間の揺らぎの中で営まれていたことを、彼のテキストを検証することで明らかにした。また、1970 年代の宗教現象学批判の内実に関しても分析を加え、そこに宗教現象学の「神学」性への批判と、いわゆる宗教概念批判の二重性があることを明らかにした。

藤原は、北欧、特にスウェーデンとフィンランドにおける宗教現象学に対するアンビヴァレントな態度がどのように形成されたかを調べた。その反・哲学的志向性が諸大学における神学との位置関係の他、ドイツの学術からの影響とそれへの対抗意識の中で強化されたこと、またその反哲学性は研究者によっては表面的なものであることを確認した。あわせて、アフリカや南アジア（バングラディシュ）において宗教現象学がどのように受容され、現在も継承されているか、さらにその場合の目的や意義づけはもとのイギリスやカナダの宗教現象学とはどのように・なぜ異なるのかを明らかにした。

以上の研究成果の詳細は、報告書『宗教現象学の歴史的変遷と地域性に関する包括的研究』により年度内に発表する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計25件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　12件）

１．著者名 久保田浩	４．巻 37 特別号
２．論文標題 C・P・ティーレの活動における「宗教学」の位置づけ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 宗教現象学の歴史的変遷と地域性に関する包括的研究　　東京大学宗教学年報	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 木村敏明	４．巻 37 特別号
２．論文標題 RGG第二版におけるファン・デル・レーウ執筆項目について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 宗教現象学の歴史的変遷と地域性に関する包括的研究　　東京大学宗教学年報	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 木村敏明	４．巻 15
２．論文標題 ファン・デル・レーウにおける宗教現象学方法論の形成過程	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東北宗教学	６．最初と最後の頁 29-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Satoko Fujiwara, Tim Jensen	４．巻 共著
２．論文標題 Professor Geo Widengren, IAHR Vice-President 1950-1960, IAHR President 1960-1970, IAHR Honorary Life Member 1996	５．発行年 2020年
３．雑誌名 G. Larsson ed, Geo Widengren, authorship and legacy	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Satoko Fujiwara	4．巻 50/1
2．論文標題 The current Conflict of the Faculties and the future of the study of religion/s	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Religion	6．最初と最後の頁 53-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/0048721X.2019.1681095	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤原聖子	4．巻 37　特別号
2．論文標題 研究の概要	5．発行年 2020年
3．雑誌名 宗教現象学の歴史的変遷と地域性に関する包括的研究　　東京大学宗教学年報	6．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 江川純一	4．巻 37　特別号
2．論文標題 ペッタッツォーニにおける宗教現象学と宗教史学	5．発行年 2020年
3．雑誌名 宗教現象学の歴史的変遷と地域性に関する包括的研究　　東京大学宗教学年報	6．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 奥山史亮	4．巻 48
2．論文標題 戦間期ルーマニアにおける宗教現象学の形成	5．発行年 2020年
3．雑誌名 北海道科学大学研究紀要	6．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 奥山史亮	4．巻 37 特別号
2．論文標題 エリアーデにおける宗教現象学とarchetypeの学的連関	5．発行年 2020年
3．雑誌名 宗教現象学の歴史的変遷と地域性に関する包括的研究　　東京大学宗教学年報	6．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 宮嶋俊一	4．巻 158
2．論文標題 祈りとしての「祝詞」について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 北海道大学文学研究院紀要	6．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/bfhhs.158.r1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 宮嶋俊一	4．巻 37 特別号
2．論文標題 ハイラーにおける宗教現象学の受容と展開	5．発行年 2020年
3．雑誌名 宗教現象学の歴史的変遷と地域性に関する包括的研究　　東京大学宗教学年報	6．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Shunichi MIYAJIMA	4．巻 15
2．論文標題 On the Complementarity between Phenomenological and Statistical Approaches for Prayer Research including East Asia	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of the Graduate School of Letters	6．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 奥山史亮	4．巻 1
2．論文標題 初期エリアーデにおける「宗教現象学」と「宗教史学」の受容をめぐる問題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 北大宗教学年報	6．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 奥山史亮	4．巻 5
2．論文標題 「原始神話体系」解題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ニュクス	6．最初と最後の頁 102-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 江川純一	4．巻 5
2．論文標題 ペッタッツォーニの「サクロロジア」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ニュクス	6．最初と最後の頁 66-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Fujiwara Satoko	4．巻 46
2．論文標題 Buddhism in RE Textbooks in England: Before Shap and After the Call for Community Cohesion	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Religion & Education	6．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/15507394.2018.1469906	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 江川純一	4．巻 下
2．論文標題 「magia」とは何か ―デ・マルティーノと、呪術の認識論―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 江川純一・久保田浩編『「呪術」の呪縛（下）』リトン	6．最初と最後の頁 65-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奥山史亮	4．巻 5
2．論文標題 エリアーデの戦時体験と苦難の正当化 ――「歴史の恐怖」と死生観の構築	5．発行年 2017年
3．雑誌名 北海道生命倫理研究	6．最初と最後の頁 25-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Satoko Fujiwara	4．巻 -
2．論文標題 "Geertz vs Asad" in RE Textbooks: A Comparison between England’s and Indonesia’s Textbooks	5．発行年 2016年
3．雑誌名 Religious Education in a Global-Local World, ed. by Jenny Berglund, Yafa Shanneik and Brian Bocking	6．最初と最後の頁 205-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Fujiwara Satoko	4．巻 47
2．論文標題 The reception of Otto and Das Heilige in Japan: in and outside the phenomenology of religion	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Religion	6．最初と最後の頁 591～615
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/0048721X.2017.1357222	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 久保田浩	4．巻 34
2．論文標題 宗教学史叙述とは何か―<ティーレ宗教学>の宗教史的文脈を手掛かりに―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東京大学宗教学年報	6．最初と最後の頁 25-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　1件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 木村敏明
2．発表標題 レーウ宗教現象学方法論の成立過程
3．学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 奥山史亮
2．発表標題 戦後ルーマニアにおける宗教的アルケタイプをめぐる言論―BlagaからAl-Georgeまで
3．学会等名 国際ミーティング：社会主義文化のネットワーク：日本、中国、ソ連、そして東欧（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 奥山史亮
2．発表標題 エラノス会議におけるアーケタイプと宗教の関連にみる倫理性
3．学会等名 宗教倫理学会2019年度第4回研究会
4．発表年 2019年

１．発表者名 奥山史亮
２．発表標題 エリアーデとエラノスにおける宗教現象学の学的連関
３．学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shunichi MIYAJIMA
２．発表標題 On the Complementarity between Phenomenological and Statistical Approaches for Prayer Research with reference to East Asian the Complementarity
３．学会等名 The 2nd Annual Conference of the East Asian Society for the Scientific Study of Religion（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 宮嶋俊一
２．発表標題 ハイラーにおける宗教現象学の受容と展開
３．学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 奥山史亮
２．発表標題 宗教現象学における体験の問題
３．学会等名 日本宗教学会第77回学術大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 奥山史亮
２．発表標題 エラノスにおける宗教倫理の問題―『ヨブへの答え』に対するエリアーデの書評を通して
３．学会等名 宗教倫理学会第19回学術大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 江川純一
２．発表標題 ペッタッツォーニ宗教史学とヴィーコの学
３．学会等名 日本宗教学会第77回学術大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 久保田浩
２．発表標題 1920・30年代の「オーディン」表象と「アトランティス・北方的」ユートピア―宗教とナショナル・アイデンティティとの関係を巡って―
３．学会等名 第2回国際ワークショップ「諸〈国民文化〉―国際的文脈における日独の視点」（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Satoko Fujiwara
２．発表標題 Between the North and the South: The History of the Study of African Religions in Japan
３．学会等名 African Association for the Study of Religions, 8th Biennial Conference in Lusaka, Zambia（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Shunichi MIYAJIMA
２．発表標題 Religion and Violence
３．学会等名 48th ISCSC (International Society for the Comparative Study of Civilizations) International Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 江川純一
２．発表標題 宗教史学における差異と反復 ―ペッタッツォーニとエリアーデ
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 奥山史亮
２．発表標題 エリアーデにおける宗教史学と宗教現象学の受容と批判
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 奥山史亮
２．発表標題 20世紀初頭のイタリアとルーマニアにおける宗教研究と政治状況
３．学会等名 宗教倫理学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 久保田浩
２．発表標題 「宗教史」の中の「宗教学」―オランダ宗教学創成期を中心に―
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計3件

１．著者名 Satoko Fujiwara, David Thurfjell, Steven Engler	４．発行年 2020年
２．出版社 Equinox	５．総ページ数 未定
３．書名 Global Phenomenologies of Religion: An Oral History in Interviews	

１．著者名 江川純一、久保田浩　編	４．発行年 2017年
２．出版社 リトン	５．総ページ数 414
３．書名 「呪術」の呪縛【下】	

１．著者名 江川純一・奥山史亮・木村敏明・久保田浩・藤原聖子・宮嶋俊一編	４．発行年 2020年
２．出版社 東京大学文学部宗教学研究室	５．総ページ数 未定
３．書名 宗教現象学の歴史的変遷と地域性に関する包括的研究　　東京大学宗教学年報	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	奥山　史亮 (Okuyama Fumiaki) (10632218)	北海道科学大学・全学共通教育部・講師 (30108)	
研究分担者	江川　純一 (Egawa Junichi) (40636693)	明治学院大学・国際学部・研究員 (32683)	
研究分担者	久保田　浩 (Kubota Hiroshi) (60434205)	明治学院大学・国際学部・教授 (32683)	
研究分担者	木村　敏明 (Kimura Toshiaki) (80322923)	東北大学・文学研究科・教授 (11301)	
研究分担者	宮嶋　俊一 (Miyajima Shunichi) (80645896)	北海道大学・文学研究科・准教授 (10101)	
研究協力者	藁科　智恵 (Warashina Chie) (60868016)	日本大学・国際関係学部・助教 (32665)	